



TITLE:

## 第16回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

---

CITATION:

第16回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1962, 31(1): 95-97

ISSUE DATE:

1962-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/204617>

RIGHT:

死亡した例である。

之に就て、長期間痔瘻が存在する間に瘻孔内口の直腸壁又は肛門腺より悪性変化を来たして粘液腺癌となつたと考えられるので若干の考察を加えて報告した。

#### (11) 電気衝撃療法による脊椎骨折の3例

岐阜医大整形外科 丹 羽 昭 右

電気衝撃療法による脊椎骨折の3例を経験したので報告します。

症例1は、50才男子、第1回目の電撃療法(ESとするにより第5胸椎骨折を来した。

症例2は、28才の男子、第4回目のESで第5,6胸椎骨折を来した。

症例3は、33才男子、第1回目のESのあと第4,5胸椎骨折を来した。

本骨折は通電時の衝撃的な痙攣と、瞬間的な胸椎中央部の後彎強制によつて発生するものと考え、従つて本骨折の予防法として、本療法施行時に、クラーレを用いて筋痙攣を緩和したり、又クラーレと静脈麻酔の併用法が有効であると言ふ。

#### (12) 羽島地方における化膿性疾患の薬剤耐性について

羽島病院外科

河村雄一、浅井紀雄、伴 敏英

昭和35年12月より本年6月12日迄に集計した外科的疾患の薬剤耐性について報告する。

皮膚炎症62例、血行感染12例、外傷7例、泌尿器疾患7例、術創感染4例、その他8例、計100例、と34例の虫垂切除術後虫垂内容について検査を行つた。

一般外科的疾患に於いて P.C. は72%、スルファ剤は82%の完全耐性を認め C.P. は51%、S.M. 50%の感受性、24%、29%の比較的感受性を認め、次いでE.M. T.C. の順である事がわかつた。虫垂内容についても大体同様の結果が出た。(P.C.: ペニシリン)

(S.M.: ジヒドロストレプトマイシン) (C.P.: クロラムフェニコール) (T.C.: テトラサイクリン) (E.M.: エリスロマイシン) (Sul.: スルフィンキサゾール)

## 第16回岐阜外科集談会

昭和36年10月25日

#### (1) 聴神経腫瘍の1例

岐阜医大第二外科 小 林 明

患者は31才男子、家族歴に父親が両側聴神経腫瘍で45才の時死亡、患者は5年前ダイナマイトが近くで破裂し難聴を来し除々に増悪し入院時は聴力両側とも60db以上の損失、脊髄液圧300mm水柱、歩行は酩酊様、脳室撮影で第Ⅲ脳室底が上方に圧排されているが脳室系の通過は良好、手術は低体温による後頭下開頭により2次的に両側聴神経腫瘍の全摘出に成功した。腫瘍は両側とも拇指頭大で組織所見は神経線維腫であつた。第2回手術後15日で死亡した。

両側生聴神経腫瘍は遺伝傾向が強いと云はれるが本症例にもそれがみられるが爆発音により最初に難聴を来した点は診断を迷はせる。中耳炎後の難聴患者でも聴神経腫瘍の症状が明かでもある場合は診断上注意が肝要であらう。

#### (2) 迷入甲状腺腺の二例

岐阜医大第一外科 可 知 稔 巳

症例1は11才女子で2~3才頃に前頸部の小豆大無痛性腫瘤に気付き年々増大してきた為、4年前に某医に依り剔出術を受けたが1年後に同一部位に再発し拇指頭大となりたる為剔出術を希望して来院した。症例Ⅱは14才女子で約1週間前に頤下部にクルミ大、無痛性腫瘤に気付き来院し剔出術を受けた。

これらは共に術前正中囊腫の診断の下に手術を受け、組織学的に迷入甲状腺腺であることが確認されたもので、これは舌内、舌下部、喉頭前、上部縦隔内、頸部後方の胸鎖乳突筋のすぐ外側或は、舌骨下方と甲状腺胸部の間の異物として現われ、又、L.Fruhling (1954)等は卵巣中に本症を見出してゐる。

以上吾々の教室に於て最近迷入甲状腺腺腫の二例を得たので報告し若干の文献的考察を加えた。

## (3) 乳腺の所謂葉状囊肉腫の一例

岐阜医大第一外科 柴田 正 敏

17才、未婚女子、左乳房に発生した巨大腫瘤で、乳腺肉腫の診断の下に摘出し、組織学的に所謂乳腺葉状囊肉腫であつた一例を経験した。

摘出標本は成人手拳よりやや大きく白色の被膜で覆われた表面手滑の腫瘤で、重量320gの実質性の腫瘤であり、断面は分葉状を呈し色は赤褐色である。

組織学的には間質結締組織が増殖し、所々に硝子様変性、粘液変性あり、不規則な腺腔形成を示す、乳腺上皮の増殖又は、分葉形成は著明でない。

## (4) 腹壁結核の一例

岐阜市民病院 米谷 淳・安江幸洋

最近我々は左上腹部に腹壁腫瘤あり、手術所見及び組織学的検査により腹壁結核と診断し得た一例に遭遇したので報告する。

症例、48才女子、主訴、左上腹部無痛性腫瘤、既往歴、家族歴に特記事項なし、現病歴、約4ヵ月前頃左上腹部に腫瘤あるのに気付く。

現症、体格栄養等中度、頸部及び四肢リンパ腺腫脹なく、胸部背部に異常なく、胸部領域影、胃腸造影に異常なし。局所所見、左肋骨弓中央部直下に鶏卵大腫瘤あり、軽度圧痛あり、血沈一時、直徑54mm、2時間91mm、血液梅毒反応(-)、手術所見、腹直筋内にチーズ様壊死組織、膿汁あり、腸腸圧掻き清拭す。基底は正常な腹横筋を認め腹腔とは無関係、その他筋肉、上下に癒着性連結なし、ストマイ、ペニシリン注入、手術創は一次的に縫合する。

## (5) 細胆管炎性肝炎の1例

岐阜至大第二外科 山田 弘

細胆管炎性肝炎の1症例について、手術時所見、手術的胆管造影像、肝組織学的所見、臨床経過等を観察したので報告する。

患者は38才男子で約2ヵ月間強度の黄疸が続き来院した。入院時黄疸指数×300であり、その他諸検査で全く外科的閉塞性黄疸を思ひしめ、手術を施行した処、肝は腫大し、胆嚢は収縮し、肝外胆管に閉塞を認めなかつた。胆嚢摘出術を行い、総胆管にカテーテルを挿入固定し、術後直ちにこれより造影剤を注入し胆管造影を行つたが、肝内肝外胆管に閉塞、走行異常はなかつた。これに加えて肝組織切片の組織学的所見よ

り細胆管炎性肝炎と診断した。治療にあつては総胆管に挿入したカテーテルより水溶性ブドウ糖を注入し好結果を得た。術後総胆管ドレナージよりの胆汁流出状態、黄疸指数及び肝機能検査の推移等を比較的詳細に報告した。

## (6) 腸結核を伴つた胃癌の一例

岐阜至大第二外科

田中千凱・菅・菅沼親彦

症例：患者、31才男子。胃X線検査及その他の臨床検査により胃癌と診断し開腹術により胃癌に腸結核を合併していた。術前胸部X線検査で両側肺尖部に結核性病変を認めた。

文献上両疾患が高率に発生する事、結核発病年齢層の40才以上への移行、即ち癌年齢層との一致を考え合せ、その合併せる症例も可成存在するものと推定し、更に結核性の腸間膜リンパ腺腫脹と胃癌の腸間膜リンパ腺転移との区別的重要性について述べた。

## (7) 腸管回転異常によると思われる十二指腸空腸狭窄の一例

岐阜医大第一外科 森 正 英

症例は44才男子。家族歴、前病歴に特記すべきものなし。現病歴、20数年前より夕食後高度の心窩部膨満感あり嘔吐して楽になる状態であつた。3年前より心窩部痛を伴つて来た。入院時全身状態比較的良好、腹部は平坦で心窩部圧痛あり。X線透視により十二指腸空腸曲に軽度の狭窄、空腸起始部より約30cm肛門側に高度の狭窄を認めた。本年8月1日開腹、十二指腸拡張し、トライツの靱帯に相当するものなし、十二指腸空腸曲と思われる部に軽度の狭窄あり更に約30cm肛門側で空腸は終末部に近い回腸の下を潜り、その周囲は癒着状となり高度の狭窄を来していた。その他に後天的に起つたと思われる様な癒着癒着等はなかつた。以上の所見の考察により、本症は胎生期中腸回転異常による十二指腸空腸狭窄である事が判つた。

## (8) 腿鞘肉腫の一例

村上外科病院 桜井 克 巳

42才女性、主婦。

右足背部の有痛性腫脹より発病し、約2年の経過にて肺転換を起し、死亡した腿鞘肉腫の一例を報告する。

手術時所見より跗趾伸筋腱鞘に一致して発生し、又組織学的には比較的小型の短紡錘形細胞が結合織間に浸潤増生し、腫瘍細胞巢は不規則な裂隙ないし乳嘴状様配列を思わしめ構造を示し Synovia 起源による腱鞘肉腫と考えられる稀な症例である。

(9) 先天性尿管弁膜形成による水腎水尿管症の一例

岐阜医大泌尿器科

後藤 薫，伊藤 鉦二

先天性尿管弁膜形成による水腎水尿管症は極めて稀れなものであるが、最近左側腹部腫脹、発熱等の臨床症状を呈して来診した患者に、術後3ヵ所に半月状弁膜を認め、此れの組織学的検索を行った。Wall & Wachter の定義に従えば明らかに先天性弁膜形成による尿管狭窄に起因する水腎水尿管症であると診断した例を報告し、聊か本症に対する考按を試みる。

追加 泌尿科 後藤 薫

只今、演者が報告しました症例中の腎盂レ線像の内、direct pyelography の術式、臨床的価値について紹介する。本法はRP, IVPの何れにても腎盂像の得られない時に、経皮的に直接に腎盂を穿刺して造影剤を注入し、腎盂撮影を行う方法で、私が1954年にはじめ

て発表した方法である。詳細は原著参照（臨床皮泌9巻1号，泌尿紀要3巻2号）。なお、これの応用として経皮的穿刺腎瘻術の術式、臨床的価値をも紹介する（泌尿紀要，3巻5号）。

(10) 膀胱全剔除後、人工S状結腸膀胱形成術の経験

木曾川病院外科

渡辺 克，和田英一

最近進行せる膀胱癌の患者に、膀胱、前立腺、及び精囊腺を一塊として切除せる後、空置せるS状結腸に尿管を移植してS状結腸及び直腸により代用膀胱造設を行つた症例を経験した。尚尿管S状結腸吻合にはMahtisen 氏法を用いた。斯くして糞便を人工肛門より、又尿を肛門から肛門括約筋によりControlして排泄せしめ、尿管へのBack Pressureと上行感染の防止を企図した。

尚長期間の経過観察を必要とするが、吾々の行つた方法に従えば、尿尿が生理的の排泄口と異なり、全く別な経路を辿る事になる欠点はあるが、手術手技が比較的簡単で侵襲が少く、更に上述の如き多くの利点を有する事を考慮に入れるならば、この欠点を補つて余りあるものと言えよう。

正 誤 表

第30巻 第4号		誤	正
p 655	1 行目	第373回例会	第374回
p 657	1 行目	第120回例会	第 12 回